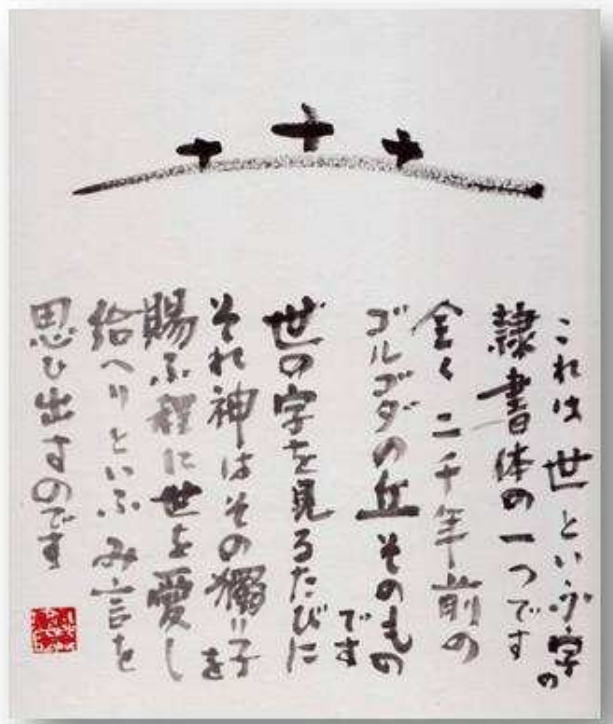


受難週に

レント（受難節）を過ごしています。今年は、知人の書家のこの「書画」を私の部屋の壁にかけて、朝夕眺めています。



私は隷書体を書くことはできませんが、なぜかこの書体が好きで、所番地のスタンプをすべて、隷書体で作ってもらってきました。エルミタージュに引っ越しましたので、彫り直してもらって、3 個目のスタンプを使い始めています。

パソコンで「隷書」を調べてみると、「世」の親字、正字となる文字は、

世 世 世 世 世

以上の5つだそうので、隷書体で表現すると、この書画に描かれているような、非常にシンボリックな姿になるのですね。

今の世は、権力者が経済最優先に走り、ずさんな危機管理を続け、平和を危うくする方向へと狂ったように進んでいます。弱者は後回しにされたまま、投げ出され、平凡でありたいと願う庶民は物言わぬ衆愚となっているように思えてなりません。私も平凡に生きている人間ですから、その中に埋没している有様です。「世」とはそのような浅ましい人間、苦しむ人間、情けない人間そのものを指しているのでしょう。「世」のひとりである私はただ、呻くような思いをもってお祈りしているだけなのですが… もちろん、「世」に希望をもたらすために懸命に闘っておられる方もおられます。そんな方々にどんなに慰められ、勇気をあたえられるかわかりません。すこしでもついて行きたいです。

聖書では「神はその独り子をお与えになったほどに、世を愛された」と告げていて、私たち哀れな人間に、命、希望、光を示してくれています。こんな惨めな人間ばかりなのに、それだからこそ、神さまは、人間を憐れみ、諦めないで生きようと、力を与えられると信じます。レントの今、この書家のこの書画を見て、聖書の言葉を心に刻みます。(2014.4.18)